様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２４ 日現在

機関番号：３３７０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２８７２

研究課題名（和文）日本語教師の発話コーパスの作成

研究課題名（英文）Creation of 'corpus data base' which records what Japanese teachers say in class.

研究代表者
藤田　裕一郎（Fujita, Yuichiro）

朝日大学・経営学部・准教授

研究者番号：３０７４４７５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　『日本語教師発話コーパス』の大規模化を目的に、５年間で計69名（約66.5時間）のデータを収集し、Web上で公開した。また、本コーパスをより使いやすくするために、ホームページとコーパスシステムの改良も行った。
　他方、本コーパスを使った自身らの研究によって、教師の発話の特徴について明らかにしただけでなく、クラスレベルによる教師の発話の違い、日本語教師と一般の日本人との発話の違い、教師の発話と「やさしい日本語」との違いなども明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究によって、日本語教師69名（約66.5時間）の発話をコーパスとしてWeb上で公開した。このコーパスでは、（１）言語研究者が教師の発話の特徴を調べる。（２）日本語教育研究者が接触場面の談話の特徴を調べる。（３）英語教育研究者が英語教育の教室活動と日本語教育の教室活動とを比較する。（４）日本語教師や日本語教師を志す人が教師の発話やその内容を内省したり概観したりする、などの調査・研究、または自己内省などを行う際の客観的なデータを提供することができる。そのため、これらの調査・研究が従来に比べ、非常に簡便に進められるようになる。

研究成果の概要（英文）：　For the purpose of enlarging the "Japanese Teachers' Speech Corpus," we collected data on a total of 69 individuals (about 66.5 hours) over a five-year period and made it available on the Web. In order to make this corpus easier to use, the website and the corpus system were also improved.
　In addition, through our own research using this corpus, we not only clarified the characteristics of teachers' utterances, but also the differences in teachers' utterances by class level, the differences between teachers' utterances and ordinary Japanese, and the differences between teachers' utterances and "Yasashi Nihongo".

研究分野：日本語教育

キーワード：コーパス　日本語教育　教師の発話　教室活動

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

特定の言語研究のために編纂される特殊目的コーパスには、母語話者の話し言葉、学習者の発話や作文、マザリーズや接触場面での会話などのコーパスがある。しかし、日本語教育において、教師の発話を分析しようとする際、現在まで日本語教師の発話コーパスがないため、母語話者の汎用コーパスで代用するか、研究者が自ら教師の発話データを収集しなければならない。ただし、母語話者の言語使用と、学習者のレベルに合わせて語彙や文法を調節する日本語教師の発話は同じではない。また、自ら教師の発話を収集しようとすれば、データ収集とデータベース化に多大な手間と労力がかかるため、小規模なデータをもとに分析しなければならなくなるであろう。

そこで、日本語教師の発話コーパスを作成し、公開することで、研究者や教師がこのコーパスに手軽にアクセスできようになり、言語学や日本語教育の発展に寄与できると考えた。

２．研究の目的

本研究では、基盤にした日本語教師発話コーパス 12 名分のデータをもとに、80 名の日本語教師の授業内発話を収集して、データベース化し、日本語教師発話コーパスとして Web 上で公開すること。そして、日本語の教育の教室研究を促進するとともに、自身らも本コーパスを使用し、ティーチャー・トークに焦点を当て教師の使用言語を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

データ収集とコーパス化に関しては、主に次の手順で行った。１）対象者である教師を年代、性差、経験年数からカテゴリー別に分け、均等化するよう調査依頼し、教師と学習者全員に了解が得られた教室の教卓などに録音機器を置き、教師の音声を録音した。２）録音終了後、業者に依頼して、文字起こしをした。３）録音した授業データ内容を教師に確認してもらった。４）表記の統一を行い、業者に依頼して、コーパス化した。

また、コーパスの大規模化に伴って、利用法や操作性、ガイドラインなどの運用面についての検討を行い、HP の修正を行った。

その他、関連学会などでアウトリーチ活動を行うとともに、自身らが実際に本コーパスを使用して、ティーチャー・トークに焦点を当て教師の発話に関する調査・研究を行った。

４．研究成果

（１）日本語教師発話コーパス作成に関する成果

途中、コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、全てを予定通りに進めることはできなかったが、５年間で計 69 名（約 66.5 時間）のデータを収集し、Web 上で公開した。また、コーパスをより使いやすくするために、図１のように HP に調査事例（「こんなことに使える」）や使用方法

図１　HP 画面

（「データと使い方」）などを掲載するとともに見やすくするための改修を行ったり、図２のように、検索方法についても授業の属性（対象人数、使用教材、授業レベル）のタグを増やすことで、利用者の利便性を図った。その結果、コーパスの利用者登録は 130 名程度になった。

図２　コーパス検索画面

（２）研究成果

研究開始２年度目から研究成果の発表を目的に、学会発表を７回、学術論文を４編執筆した。

①「ティーチャー・トークにおける「まあ」の使用 -教科書発話には見られない日本語教師の不規則発話-」（日本語教育学会秋季大会，2017）

日本語教師の発話コーパス（立部・藤田，2015）を使用し，①ティーチャー・トークに「まあ」がどの程度使用されるか,②使用されるならば,どのように使用されるかを調査した。その結果,初級日本語クラスにおける日本語教師 12 人の発話（約 19 時間）の中に，135 例の使用が観察できた。これにより、ティーチャー・トークには書き言葉的で規則性が高い側面と，自然な話し言葉の不規則な側面の両方があるということがわかった。

②「日本語授業でのインプットと教室外のインプットの比較」（留学生教育学会，2019）

教室内で使用される和語動詞の使われ方が教室外での使われ方と異なるか，教師の授業内発話，教師の作例，母語話者の日常会話を対象に比較，検討した．その結果，教師の授業内発話は授業内容の影響により，偏りが見られるが，作例とともに，母語話者の日常会話同様，幅広い用法の使用が見られ，大きく異なるものではないことがわかった。

③「日本語学習者が接する授業内インプットと教室外インプットの比較」（朝日大学留学生別科紀要，2019）

②の研究発表の内容を加筆修正し、研究論文として執筆した。

④「学習初期段階の「ネ」の学習者ルールとその要因―学習者コーパスと日本語教師発話コーパスの比較から―」（徳山大学論叢，2019）

自然な日本語の習得を目指す学習者にとって習得が不可欠な「ネ」という言語形式を学習者の発話コーパスをもとに観察、分析した。その結果、学習初期段階の学習者が用いる「ネ」には、形態的な面では「形容詞+ネ 」という特徴が、また学習者の使用場面では「評価性を有した発話 」において「ネ」を用いるというルールを形成している可能性があることがわかった。

⑤「日本語教師発話の分析―中級レベル授業と初級レベル授業の比較―」（日本語教育学会春季大会，2020）

『日本語教師発話コーパス』（立部・藤田 2015）に含まれる発話データを用いて、初級レベル、中級レベル以上の日本語教師の発話を比較した。その結果、1）教師は初級レベルの授業において、中級レベル以上に比べて短い文で話していること。2）教師は初級レベルの授業に比べ、中級レベル以上の授業ではより多くの語彙を使っていること。3）使用する語彙レベルは初級のほうが易しいことが量的調査によっても明らかになった。

⑥「日本語教師の発話に見られる副詞「ちょっと」の考察」（日本語教育学会秋季大会，2020）

日本語教師の発話に見られる副詞「ちょっと」がどの程度、そしてどのように用いているか。また、教師による違いが見られるかを調査した。その結果、ティーチャー・トークの中で「ちょっと」はあまり観察されないだろうと予想されたたものの、全体としてはごく頻繁に、そして幅広い用法での使用が観察された。さらに、その使用について、教師により異なることもわかった。

⑦「日本語教師発話の分析－初級と中・上級レベル授業、そして母語話者同士の会話を比較して－」（朝日大学留学生別科紀要，2021）
　『日本語教師発話コーパス』、『BTSJ 日本語自然会話コーパス』を使用して、教師の発話と母語話者同士の発話を比較、検討した。その結果、１）量的な調査を行った本調査においても、ティーチャー・トークによる言語調整が行われていることが確認されると同時に、２）教師は初級レベルの授業において、中・上級レベルより一層言語調整を行っていることがわかった。また、ティーチャー・トークと母語話者同士の会話と比較することで、３）初級での教師の発話は母語話者同士の雑談よりも易しいこと。４）中・上級での教師の発話はおおむね母語話者同士の雑談程度の難易度であること。５）母語話者同士の論文指導時の発話は中・上級での教師の発話よりも難しいことがわかった。

⑧「習熟度別に見た学習者の「ちょっと」の使用の分析」（日本語教育学会春季大会，2021）
　『日本語教師発話コーパス』を使用して、日常的な会話において頻繁に使われる副詞「ちょっと」を取り上げ、学習者の産出を横断的に調査した。その結果、①学習者の習熟度により「ちょっと」の使用傾向に違いがあること。②同一形式の異なる用法について、同程度の理解可能なインプットが与えられたとしても、用法の複雑さによって、アウトプットに至るまでの時間が異なること。③言語構造や意味の複雑さに加え、対人関係を調整するポライトネスも複雑さの一因なり得ることがわかった。

⑨「日本語教師の専門性「ティーチャー・トーク」の分析「やさしい日本語」との比較」（第 25 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム，2022）
　これまでの研究成果などをもとに、「ティーチャー・トーク」と「やさしい日本語」との比較、検討から、日本語教師の専門性について論じた。議論において両者の特長を、成り立ち、役割、調整、使用者と対象者、言語モードの観点から比較、検討した。その結果、「ティーチャー・トーク」は教育的な側面が重視されていること、そして、「ティーチャー・トーク」の役割が教室環境において果たされるためには、日本語教師が目の前の対象者である日本語学習者の日本語レベルを判別できる必要があり、この判別する能力が日本語教師の専門性に関わることが明らかとなった。

⑩「日本語教師の授業内発話に関する考察―学習者への働きかけ発話の分析―」（日本語教育学会秋季大会，2022）
　『日本語教師発話コーパス』を使用して、日本語教師が授業内において「わかりやすさ」と「自然さ」どのように共存させているのか，ひとつひとつの発話を観察した。その結果，1）教師は学習者全体に向けて話すよりも，学習者個人に向けて話す発話のほうが多いこと。2）各授業に関して教師の発話の 3 分の 1 から 4 分の 1 程度が学習者に対する「働きかけ」であること。3）全ての教師が授業の際に敬体と常体の両方を使用しており，敬体，もしくは常体のみで話される発話，そして敬体と常体が織り交ぜられた発話をしていることがわかった。

⑪「日本語教師の専門性「ティーチャー・トーク」の分析「やさしい日本語」との比較」（ヨーロッパ日本語教育，2023（印刷中））
　⑨の研究発表の内容を加筆修正し、研究論文として執筆した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 藤田裕一郎・立部文崇	４．巻 19
２．論文標題 日本語教師発話の分析 －初級と中・上級レベル授業、そして母語話者同士の会話を比較して－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 朝日大学留学生別科紀要	６．最初と最後の頁 33-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 立部文崇	４．巻 42
２．論文標題 終助詞「ネ」の習得研究に関する考察	５．発行年 2020年
３．雑誌名 徳山大学研究所紀要	６．最初と最後の頁 59-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 立部文崇、藤田裕一郎	４．巻 89
２．論文標題 学習初期段階の「ネ」の学習者ルールとその要因―学習者コーパスと日本語教師発話コーパスの比較から―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 徳山大学論叢	６．最初と最後の頁 19-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 藤田裕一郎、立部文崇	４．巻 17
２．論文標題 日本語学習者が接する授業内インプットと教室外インプットの比較	５．発行年 2019年
３．雑誌名 朝日大学留学生別科紀要	６．最初と最後の頁 17-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 立部文崇・藤田裕一郎
2．発表標題 日本語教師発話の分析　　―中級レベル授業と初級レベル授業の比較―
3．学会等名 日本語教育学会
4．発表年 2020年

1．発表者名 藤田裕一郎・立部文崇
2．発表標題 日本語教師の発話に見られる副詞「ちょっと」の考察
3．学会等名 日本語教育学会
4．発表年 2020年

1．発表者名 藤田裕一郎・立部文崇
2．発表標題 日本語授業でのインプットと教室外のインプットの比較
3．学会等名 留学生教育学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 立部文崇
2．発表標題 日本語教師が授業内で発する終助詞の一考察：日本語初級レベ ルの日本語授業から
3．学会等名 日本語プロフィシエンシー研究学会
4．発表年 2019年

１．発表者名 藤田裕一郎・立部文崇
２．発表標題 ティーチャー・トークにおける「まあ」の使用―教科書発話には見られない日本語教師の不規則発話　―
３．学会等名 日本語教育学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 藤田裕一郎・立部文崇
２．発表標題 習熟度別に見た学習者の「ちょっと」の使用の分析
３．学会等名 日本語教育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 立部文崇・藤田裕一郎
２．発表標題 日本語教師の専門性「ティーチャー・トーク」の分析「やさしい日本語」との比較
３．学会等名 ヨーロッパ日本語教育シンポジウム
４．発表年 2022年

１．発表者名 立部文崇・藤田裕一郎
２．発表標題 日本語教師の授業内発話に関する考察―学習者への働きかけ発話の分析―
３．学会等名 日本語教育学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

日本語教師発話コーパス http://www.corpus-ft.com/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	立部　文崇 (Tatebe Fumitaka) (10724081)	周南公立大学・経済学部・准教授 (35502)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関